

近代文学研究叢書

第三十八卷

昭和48年7月31日 印刷
昭和48年8月20日 出版

[¥ 2500]

著者

昭和女子大学近代文学研究室

発行者

東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
小林寅次

印刷者

東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地
梶原忠幸

発行所

東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
昭和女子大学近代文学研究室
振替口座 東京一七〇八六七番
電話代表 (422) 五一三一番

近代文学研究叢書

第三十八卷

昭和女子大学

近代文学研究室

口 絵 写 真

江
見
水
陰

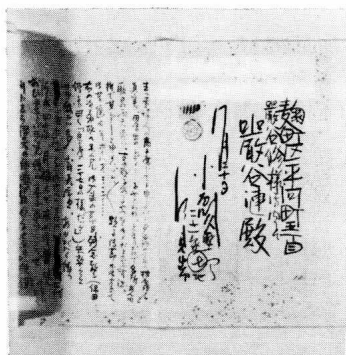
バ
ジ
ル
・
ホ
ー
ル
・

チ
エ
ン
バ
レ
ン

坪
内
逍
遙

江 見 水 蔭 (1)

→ 筆蹟 (巖谷小波宛書簡) 明治二十一年七月



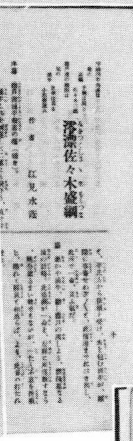
← 肖像

← 「今井慶」——明治二十四年五月 (昭和女子大学蔵)



→ 「落漂佐々木盛綱」——江戸紫 明治二十三年十月所載

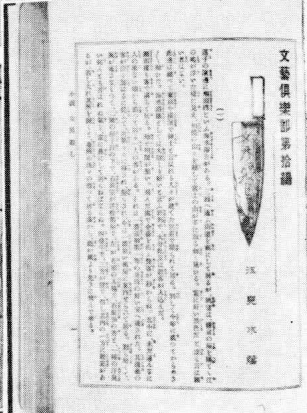
「水蔭叢書」——明治四十三年八月刊 (昭和女子大学蔵)



→ 「女房殺し」——文芸倶楽部 明治二十八年十月所載

「加藤清正」——明治二十七年十月刊

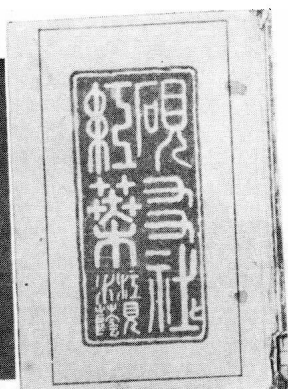
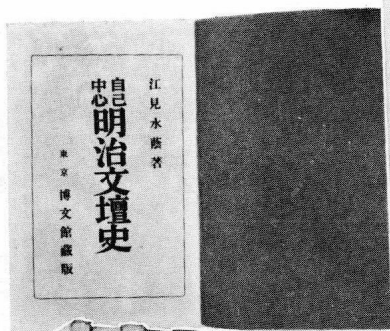
(昭和女子大学蔵)



江 見 水 蔭 (2)

→「自己明治文壇史」——昭和二年十月刊
中心「明治文壇史」

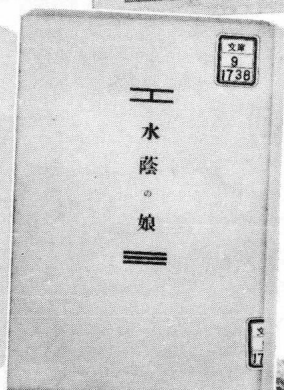
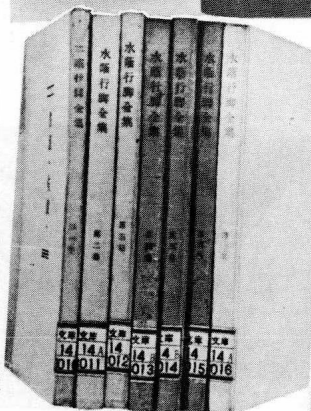
(昭和女子大学蔵)



↑「硯友社と紅葉」——昭和二年四月刊
←「水蔭の娘」——昭和八年七月刊

(昭和女子大学蔵)

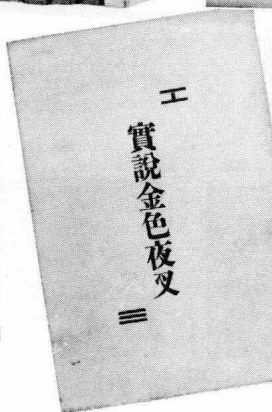
→「水蔭行脚全集」——昭和七年十二月、九年九月刊 (昭和女子大学蔵)



←水蔭の墓——谷中墓地

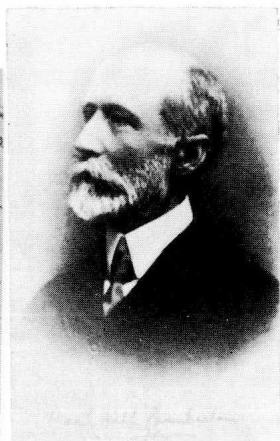
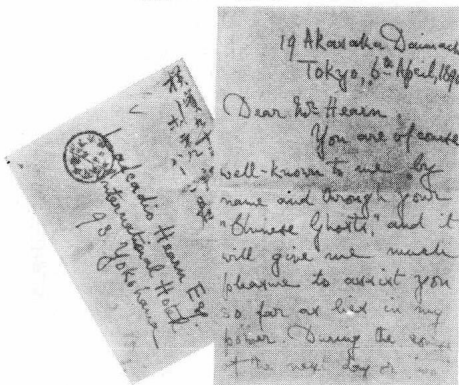


→「実説金色夜叉」——昭和九年六月刊
(昭和女子大学蔵)



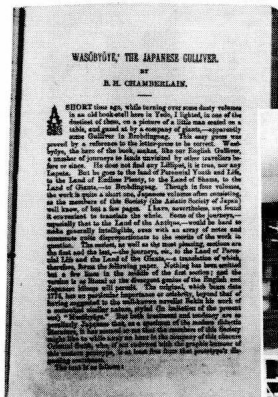
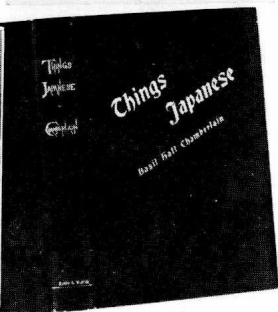
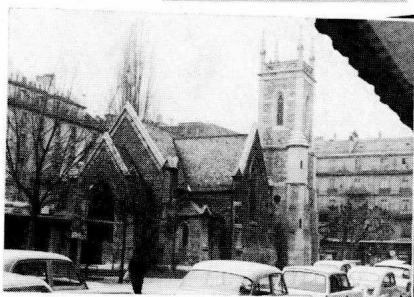
バジル・ホール・チェンバレン

筆蹟—ハーン宛手紙

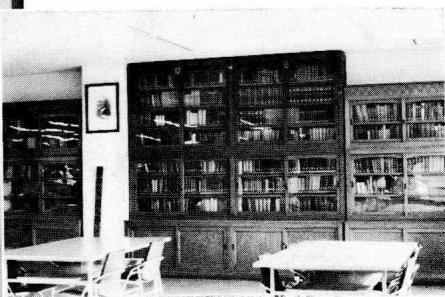


肖像

→ 英国教会—ジュネーヴ

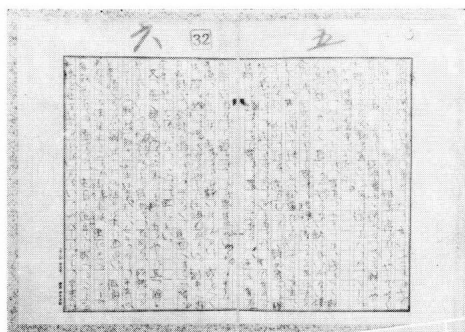


↑ 「日本風物誌」—明治二十三年刊（国会図書館蔵）
 ↓ 「Wasōbyōyō, the Japanese Gulliver TASI 1879年所載，1964年翻刻版（昭和女子大学蔵）
 ↓ チェンバレン文庫—愛知教育大学図書館内



坪 内 逍 遙 (1)

→ 筆蹟 (昭和女子大学蔵)



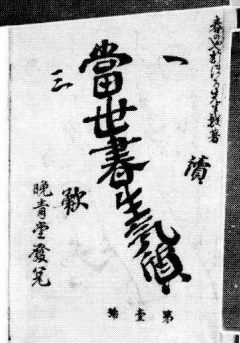
← 肖像



← 「小説神髓」——明治十八年九月十九年四月



→ 「三讀當世書生氣質」——昭和十八年六月刊 (昭和女子大学蔵)



「該撒奇談」
明治十七年五月刊
(昭和女子大学蔵)

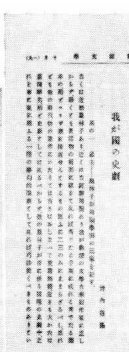
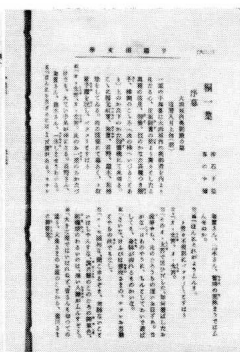


← 「未来の夢」——明治十九年四月刊

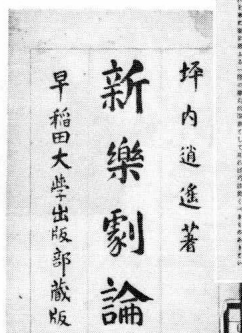


坪内逍遙 (2)

←「桐一葉」——早稲田文学 明治二十七年十一月所載 (昭和女子大学蔵)



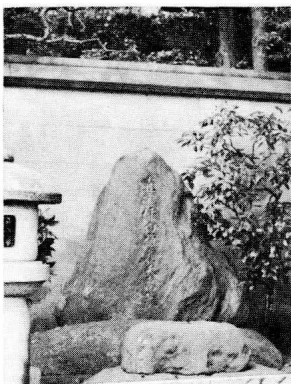
旧居雙柿舎——静岡県熱海市



→「我が国の史劇」——早稲田文学 明治二十六年十月所載

「新楽劇論」——明治三十七年十一月刊 (昭和女子大学蔵)

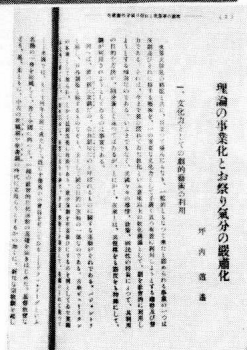
→逍遙の墓——熱海市



→筆塚——雙柿舎の庭内



←「理論の事業化とお祭り気分の嚴肅化」——早稲田文学 大正十年一月所載



目次

口	第三十八卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室……(一〇)
凡	例	昭和女子大学編集室……(二三)
江	見水	近代文学研究室……(二五)
バジル・ホール・	チエンパレン	近代文学研究室……(二五)
坪	内道遙	近代文学研究室……(二五)
近代文芸年表	例	近代文学研究室……(四〇)
卷末付記		近代文学研究叢書編集室……(四五)

第三十八卷の成立

本巻は昭和期第十三巻として、昭和九年一月から昭和十年二月までに歿した左記三名の研究調査を収めた。

江見水蔭は小説家。本名忠功。明治二年（一八六九）父鋭馬、母友の長男として岡山市大字一番町に生まれた。家は代々池田藩の武家。明治十四年、軍人を志して上京したが文学へ心を向け十八年称好塾に入る。ここで巖谷小波、尾崎紅葉を知り硯友社同人となる。二十二年「文庫」に「旅絵師」をのせ文筆活動に入る。二十五年自ら「江水社」を設立して個人雑誌「小桜緖」を発刊、独自の詩情豊かな短篇を発表した。このころから濫作の傾向を示し「初霞」(都の花)「焼山越」(読売新聞)などを多作した。二十七年十月中央新聞記者として小説専門となる。日清戦争の勝利にわいた時宜を得て「夏服士官」を掲載、好評を博した他「女房殺し」「炭焼の烟」など発表、作家として脂がのりきっていたが生活の破綻から読売新聞を経て神戸新聞に都落ちする。三十二年、博文館に入社。週刊新聞「太平洋」主筆となる。「旅役者」「水の魔術」など中央文壇への復帰を飾るに足る作品を上梓、三十四年には「小桜緖」復刊。一方相撲に力をいれ国技館は水蔭の命名という。又「オセロ」の翻案により新劇と文士の接触の道を拓くなど多彩な仕事ぶりで晩年は講演と揮毫の旅を続け「水蔭行脚集」全八巻を上刊。「硯友社時代―隠れたる硯友社作家」を執筆、文学史研究に貴重な資料を提供した。昭和九年十

一月、六十五歳で客死。

バジル・ホール・チェンバレンは英国の日本研究家、言語学者。嘉永三年（一八五〇）十月十八日、サウススリー（ポーツマス）に、父ウィリアム・チャールズ・チェンバレン（英国海軍提督）と母エライザ・ジェインの長男として生まれた。八歳で母と死別し弟二人と祖母のもとで暮らした。病弱の為オックスフォード大学進学も断念したチェンバレンは、健康回復のための遠洋航海で横浜に着港したのが明治六年五月、二十三歳であった。以後四十年近くにわたる日本滞在生活を送った。専ら日本語及び日本文学の研究に終始し、かたわら帝国大学で博言学（言語学）、和文学（国語学）を講じ、一方、著作活動も活潑であった。労作「古事記」の完訳、アイヌ語の研究として「アイヌ研究」より見た日本の言語、神話及地名」の論考を帝大紀要に発表。又「日本小文典」は日本人の国語学研究勃興の導火線となり、「日本口語文典」は当時の日本における新分野を開拓したものととして画期的成果をもたらした。明治二十三年帝大を退職後は一旦帰英、その後度々日本を訪れて著作をしつつ四十三年の九州旅行を最後に四十四年日本に永訣、昭和十年（一九三五）二月十五日スイスで八十五歳の長命を全うした。著書は前記の他に「日本風物誌」「日本の詩歌」「鼠は生きてゐる」等多数。

坪内逍遙は小説家、評論家、劇作家、劇評家、英文学者、翻訳家、教育者。安政六年（一八五九）五月、父、代官平之進、母ミチの末子として岐阜で生まれた。号は春のや主人、春のやおぼろ、柿叟等。修学時代、外人

教師から語学、シェイクスピア講義を受ける。明治九年上京開成学校入学。高田早苗と親しみ西洋文学熱にひきこまれる。戯作文学と西欧の近代的文学の違いを明らかにしようとつとめ「小説神髓」「当世書生気質」を作す。演劇方面の改良運動としては勸懲の具にせずあくまで人情を写すべきことを主唱。鷗外との文学論争「没理想」論は約九カ月にわたり「しがらみ草紙」「早稲田文学」誌上に展開された。二十九年早稲田中学の創立に参与、教頭、校長を勤めて青少年教育に尽力。時勢に対する倫理、道德教育の重大さから文芸活動を控え、その後は演劇への関心とシェイクスピア作品の翻譯に集中した。四十二年、逍遙邸内に演劇研究所を設立、主として西欧の劇を上演した。大正四年早大を退き熱海に双柿舎を営み終焉までこの地に居住した。彼の道義的常識的文芸観による文芸教育上の功は大きく特に演劇の革新に大きな力となった。又文壇早稲田派の総帥として多くの文学者を育てた。昭和十年二月、熱海雙柿舎で死去、享年七十六歳。

(昭和女子大学近代文学研究室)

凡 例

一 著作年表は、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを収め、資料年表は、第三者の考説、論評、感想等の文献を収めた。単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げることとする。

二、各稿の末尾に「採訪」と「文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表すると同時に、資料の出所、起稿や修訂に当って参考した文献書目を記して、その依拠を明らかにした。ために資料年表と一部重複することがある。なお採訪した人の記名は年齢（推定）順、文献の記載も発表年次順にした。

三 引用文はすべて原文に従い、外国文の場合は訳文又は大意を添付する。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（マ）と記入する。

四 邦人氏名は旧漢字を用い、見出しに振りがなをつけ、外人名の初出は原語を付し以下片かなを用いる。なお外国の国名、地名、人名は片かなを原則とするがすでに日本語化しているものは漢字を用いる場合もある。

五 年代に日本年号と西暦とを適宜織りまぜて、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を用いたが、場合によって数え年何歳と記すこともある。

（昭和女子大学編集室）

江^え

見^み

水^{すい}

蔭^{いん}

昭明
和治二
九年

（一
八九
三六
四九
）

一八
月十
二日
歿生